

〈第 51 回〉 菅野 倅信(すがの よしのぶ)と歴史(近現代日本史)を学ぼう会

『伝えたい日本の心』

歴史を取り戻すことはできないが、歴史を正しく振り返ることはできる…。」

■ 日本の近現代史の真実の姿を求めて(タイムトラベル) 歴史の証言シリーズ ■

日 時 令和元年(2019年)12月14日(土曜)午後7時より

会 場(問い合わせ先) 大阪旭モラロジー事務所

〒535-0022 大阪市旭区新森4丁目12-2

大阪旭モラロジー事務所(中野こども病院別館キンダーホープ1階)

電 話 06-6952-8111

FAX 06-6952-8121

『赤旗のもと、敗戦後の悲劇』

■ 第一講 ■

☆(一)

日本軍の多くは天皇陛下の命を受けて8月15日の敗戦のラジオ放送後、武装解除に応じたが、悲劇はそれで終わらなかった。

満州、北朝鮮からの引き揚げ途中に、家族を亡くした者、全員が無念の最期を遂げた家族は非常に多い。終戦時、北朝鮮にいた日本人24万6千人余りのうち、死者は確認されているだけで約2万3500人にも上る。

8月15日に戦争は終わったが、外地の日本人にはその瞬間、「新たな戦争」が始まった。

ソ連軍は、満州や朝鮮、南樺太、千島のシュムシュ島(占守島)などから約57万5千人をシベリアやモンゴルなどに連行し、森林伐採や鉄道敷設などの重労働を強いた。飢えと寒さ、虐待などで約5万5千人が命を落とした。

だが、シベリア抑留はロシア国内では、ほとんど認知されていなかった。

抑留者は「軍事捕虜者」と称された。

この大雑把な認識はロシア人自身が、対独戦とスターリン時代の弾圧で膨大な犠牲者を出したことに根ざす。

ソ連末期、閲覧可能になった旧ロシア時代の弾圧犠牲者の資料を調べる中で「囚人」に交じって日本人が強制労働させられたことが初めて明らかになった。

「極東は、辺境の地なのでですすんで働きたいという人は少ない。それでも国土維持のための労働力が必要だということで、政治弾圧された人々が囚人として送り込まれていた。

ソ連政府は囚人をただ働きさせるのと同じ発想で日本人を抑留したのだ。」

約57万5千人に上る日本人抑留は、ポツダム宣言の(第9項)

「日本軍は武装を解除された後、各自の家庭に復帰し、平和的な生活を営む機会を与えられる」の条文に照らして明白な違反だが、ソ連共産党書記長のヨシフ・スターリンの指示により極めて計画的に行われた。

☆(二)

シベリア抑留の原因は1945(昭和20)年2月、米英ソ3首脳が戦後処理を話し合ったヤルタ会談にある。

ここでスターリンは第32代米大統領のフランクリン・ルーズベルトの以前からの要請であった対日参戦を約束するにあたっての条件として、満州や千島列島などの権益を要求した上で、もう一つ重要な条項についての取り決めを要求した。

その内容は、ドイツが連合国に与えた損害を（1）国民資産（工作機械、船舶など）（2）日常的な生産物（3）労働力で現物賠償させることを決めたものだった。

問題は、(3)の「労働力」だった。米英は、まさかソ連が協定を盾に戦後も捕虜らに強制労働させるとは思っていなかったようだが、ソ連は「米英のお墨付きを得た」と受け取った。

英首相のウィンストン・チャーチルは後にスターリンの非人道性に気づき、二の句を継げなかったと回顧した。

1945年7月のポツダム会談で、チャーチルが英国の炭鉱労働者不足を嘆くと、スターリンは事もなげにこう言った。

「それなら、ヤルタ協定で決めたように、炭鉱でドイツ人捕虜を使うことだ。私はそうしている」

スターリンにとって「捕虜＝労働力」は「戦利品」だったのだ。

対日参戦の目的は領土拡大だけでなく「労働力」確保にもあったのだ。

☆(三)

ソ連は戦後も400万人以上の外国人捕虜を長期間抑留した。最も多かったのはドイツの約240万人、次に日本、3番目がハンガリーの約50万人だった。

また、1945年(昭和20年)9月2日、スターリンは対日「戦勝」記念演説で次のように語った。

「1904年の日露戦争でのロシア軍の敗北は国民の意識に重苦しい思い出を残した。この敗北はわが国に汚点をしるした。わが国民は日本が粉碎され、汚点が一掃される日が来ることを信じ、そして待っていた。その日は訪れた。このことは、南樺太と千島列島がソ連に移ることを意味する」

スターリンのこの演説は日露戦争への報復と領土拡張が日本との戦争の目的だったことを示している。

しかし、レーニンは、「ロシア皇帝が日露戦争に負けたから、われわれは革命を成就できたのだ」と、演説のなかではっきりと述べている。1905年1月の血の日曜日事件を契機にロシア第一革命が勃発し、後にロシア帝国をロシア民衆が自らの手で滅ぼしたのではなかったのか。

レーニンの後継者であるスターリンにこの矛盾を問いたい。 #産経新聞より一部抜粋

■第二講■

☆(四)

『なぜシベリア抑留者は口を閉ざしたのか ソ連の「赤化教育」の恐怖の実態は…。』

ソ連軍により、シベリアへ抑留され、帰還した日本人将兵は50万人を超えるが、その多くが抑留体験について口を閉ざした。寒さと飢え、重労働、仲間の死。

思いだしたくもないのは当然だが、もう一つ理由があった。それは、日本の共産主義化をくろむソ連の赤化教育だった。

ラーゲリ(収容所)の隣はソ連極東軍総司令部と裁判所。尋問や裁判で連行された将校や下士官がラーゲリに宿泊する度につるし上げられた。

ハバロフスクのラーゲリで「民主運動」という名の赤化教育が始まったのは昭和21年秋。労働を終えた午後7時ごろから1時間ほど、共産党員だった日本人が「共産党小史」を基に講義した。

見込みがある者は「小学校」「中学校」と呼ばれる教育機関に入れられ、さらに赤化教育を受けた。「中学校」を卒業した“優秀者”は、各ラーゲリの選抜メンバーとともに1カ所に集められ、3カ月間強化教育を受けた。収容所に戻ると指導的立場となった。

民主教育の名のもとに赤化運動は次第に過激化し、将校や下士官だけでなく、共産主義に賛同しない者は、次々に糾弾された。

日本人同士の密告も横行し、ラーゲリ中に人間不信が広がった。多くの抑留者が、口をつぐむ理由は、ここにあったのだ。

☆(五)

ソ連が日本人将兵を抑留したのは「労働力」目当てだったが、途中からアクチブ(活動分子)を養成して日本を共産主義化させようと考えを変えたのだ。

赤化教育に利用したのが、ソ連軍政治部が週3回発行する抑留者向けのタブロイド紙「日本新聞」だった。編集長はイワン・コワレンコ。後に対日工作の責任者となり「闇の司祭」と呼ばれた男だった。

共産主義を礼賛し、天皇制の打倒や日本の批判を繰り返すプロパガンダ紙だが、日本語に飢えていた抑留者に次第に浸透した。

共産主義に賛同し、アクチブと認定されれば、ラーゲリでの処遇が改善され、早く帰還できる。実に陰湿な心理作戦だが、効果は大きかった。旧軍の序列を維持しながら助け合ってきた抑留者たちは次第に将校、下士官、兵で反目するようになった。密告も横行し、相互不信が広がった。

「天皇制打倒」「生産を上げよ」「スターリンに感謝せよ」。
ラーゲリの入り口にはこんな張り紙がベタベタ張られ、入所者の目には敵意がみなぎるようになっていった。そこは「民主運動」を隠れ蓑(ミノ)とした「赤化教育」の最前線だった。

☆(六)

つるし上げは、連日続いた。

「労働を怠けた」とのいいがかりから、「反動」の烙印を押されると、作業中も、食事中も、用便中さえも、大勢に囲まれ、罵倒された。

日本人としての中心性をなくしてしまい人間性が崩壊してしまう。

赤化教育に染まらない反動分子には、通訳もない裁判が行われ、判決は反ソ諜報罪で強制労働25年を言い渡された。

結局、最後の抑留者が帰国できたのは昭和33年12月26日。何と、終戦から13年後のことだった。最終引き揚げ者1024人は、京都・舞鶴港に降り立った。

ソ連は、共産党への忠誠を誓った「誓約引揚者」を優遇帰国させたが、日本を共産主義化させるというもくろみは外れた。

確かに一部は1960年安保闘争などで大衆扇動やスパイ活動に従事したが、多くの引き揚げ者は従わなかった。

ソ連で共産党の残虐さと非人道性を嫌というほど味わったからだ。ただ、赤化教育のトラウマ（心的外傷）は生涯消えなかった。

☆(七)

『戦後の赤化（左傾化）』はこうして根づいていった。

敗戦後の米軍による占領政策の中でも効果を上げたのが、密かに国際コミンテルンの影響を強く受けていた民間情報教育局（CIE）のメンバーによる「ウオー・ギルト・インフォメーション・プログラム（WGIP）」だった。巧みな情報統制とプロパガンダにより、東京大空襲や原爆投下を行った米軍への怒りは日本軍や日本政府に向けられ、贖罪意識は日本人の心の奥深くまで浸透していった。

1951年9月のサンフランシスコ講和条約調印により、翌52年4月に日本は再び独立を果たすが、WGIPの呪縛（日本への共産化）はなお続いた。

そこにソ連・中国の両共産党が対日工作を強化させ、社会主義への幻想を振りまいた。

【終戦直前の1945年8月9日、ソ連は日ソ中立条約を破って満州に侵攻し、樺太、千島列島などを次々に占領していった。満州などに入植していた百数十万人は塗炭（とたん）の苦しみを味わうことになるのだが、悲劇はそれだけではなかった。満州などにいた日本人将兵約57万人はシベリアで強制労働を強いられ、1割近くが極寒の地で命を落とした。】

だが、ソ連の対日工作を受け、すっかり赤化してしまった日本の報道機関は、これらの惨状を大きく伝えることはなく、むしろ日本の戦争犯罪追及に血眼になった。

米軍によるWGIPによる自虐史観とソビエト、中国の共産党による社会主義への幻想を融合させた日本独自の奇妙な教育と歴史観は、こうして高学歴の人ほどその影響を強く受けた。国会議員や官僚も例に漏れないまま現在に至っている。 # 産経新聞に加筆